

公立はこだて未来大学 2014 年度 システム情報科学実習
グループ報告書

Future University Hakodate 2014 System Information Science Practice
Group Report

プロジェクト名

いかロボットで函館を盛り上げよう

Project Name

Let's heap up Hakodate with squid type robot.

グループ名

企画班

Group Name

Planning group

プロジェクト番号/Project No.

4-A

プロジェクトリーダー/Project Leader

1012085 秋山翔 Sho Akiyama

グループリーダー/Group Leader

1012029 佐々木孟志 Takeshi Sasaki

グループメンバ/Group Member

1012085 秋山翔 Sho Akiyama

1012155 杉山梨花 Rika Sugiyama

1012105 和田拓馬 Takuma Wada

指導教員

松原仁 柳英克

Advisor

Hitoshi Matsubara Yanagi Hidekatsu

提出日

2015 年 1 月 14 日

Date of Submission

January 14, 2015

概要

本プロジェクトは、函館市が抱える「観光客の減少」に対する問題を IKABO の製作を通じて解決することを目的としている。2006 年 4 月に IKABO の製作を目指す市民有志らによって「ロボットフェス・インはこだて市民の会」が発足し、その後 IKABO の製作には本学を始め、函館工業高等専門学校や民間企業、前述したロボットフェス・インはこだて市民の会が参加し、函館の教育機関と企業の協力のもとで行われた。IKABO の製作は「函館市の新たな観光シンボルを製作し、函館の活性化に繋げ、そして将来的には函館をロボット情報の集積・発信基地に育てる」という理念を掲げている。本プロジェクトは、これらを達成する活動の一環としてイベントを積極的に行い、企画班はイベントの企画・開発及び運営を担当している。

キーワード キーワード IKABO, 企画, イベント

(※文責: 佐々木孟志)

Abstract

This project's purpose, to resolve through the production of IKABO that problem of "decrease of tourists" of Hakodate. "Meeting of the robot festival in Hakodate citizen" was launched by citizen volunteers which aims to manufacture of IKABO in April 2006. Then our university, "meeting of robot festival in Hakodate citizens", private companies and Hakodate Industrial specialty high school are participating to the production of IKABO, it was conducted under the cooperation of educational institutions and businesses of Hakodate. Production of IKABO is manufacture a new tourist symbol of Hakodate and lead to activation of Hakodate, We have raised the idea of "foster Hakodate to base of an integrated and disseminate of the robot information" in the future. This project, as part of the activities to achieve these, we actively do event, planning team is in charge of management and planning and development of the event.

Keyword Keyrods IKABO, planning, event

(※文責: 和田拓馬)

目次

第 1 章	背景	1
1.1	前年度の成果	1
1.2	現状の問題点	1
1.3	課題の概要	2
1.3.1	IKABO の知名度について	2
1.3.2	IKABO イベントについて	2
第 2 章	到達目標	3
2.1	本プロジェクトにおける目的	3
2.2	具体的な手順・課題設定	3
2.2.1	Twitter や Facebook を用いた広報活動	3
2.2.2	ホームページの運営	3
2.2.3	イベントの企画と運営	3
2.2.4	街頭アンケートの実施	4
2.2.5	ロボットフェス・イン函館市民の会との会合	4
2.3	課題の割り当て	5
2.3.1	の手順 杉山	5
2.3.2	の手順 秋山 和田	5
2.3.3	の手順 グループ全員	5
2.3.4	の手順 グループ全員	5
2.3.5	の手順 グループ全員	5
第 3 章	課題解決のプロセスとその結果	6
3.1	知名度向上に対するプロセスとその結果	6
3.2	イベントに対するプロセスとその結果	6
3.2.1	今年度のイベントの方向性	6
3.2.2	葛谷書店でイベントを行うにあたっての準備	7
3.2.3	イベントのコンセプトと内容	7
3.2.4	葛谷書店との話し合い	8
3.3	企画内容	8
3.3.1	IKABO ショー	8
3.3.2	体感コーナー	8
3.3.3	IKABO カフェ	9
3.4	イベント当日	9
3.5	アンケート	10
3.5.1	概要	10
3.5.2	アンケート内容	10
3.5.3	アンケート結果	11

3.6	フィードバック	12
第 4 章	プロジェクト内のインターワーキング	13
4.1	プロジェクト全体での合同作業	13
第 5 章	まとめ	14
5.1	プロジェクトの成果	14
5.1.1	IKABO の知名度について	14
5.1.2	IKABO イベントについて	14
5.1.3	インターネットを用いた広報活動について	14
5.1.4	その他企画班の活動について	14
5.2	プロジェクトにおける自分の役割	15
5.2.1	佐々木孟志	15
5.2.2	秋山翔	16
5.2.3	和田拓馬	17
5.2.4	杉山梨花	18
第 6 章	今後の展望	19
6.1	企画・提案について	19
6.2	来年度の新幹線セレモニーイベントについて	19
6.3	例年のイベントについて	19
6.4	函館蔦屋書店イベント	20

第 1 章 背景

1.1 前年度の成果

企画班における前年度前期の成果は、6月に花と緑のフェスティバルでイベント活動を行った。イベントでは、IKABO によるクイズショーとグッズの販売を行った。8月の函館港祭りでは IKABO を山車に乗せて市内を巡航し函館市民との交流を図った。また、これらのイベントにおいて IKABO の知名度が低いことが分かり、後期ではホームページの作成、twitter や facebook などの SNS を用いた広報活動、市立函館高校での発表会、IKABO 名刺の作成と配布を行った。これらは活動記録の記載や、イベントの宣伝も兼ねて行われた。また、発表会では IKABO が登場するプロモーションビデオを作成し好評を受けた。

(※文責: 秋山翔)

1.2 現状の問題点

企画班における現状の問題点は主に 2 つある。1 つ目は、IKABO の知名度について記録している統計データが存在せず、客観的に知名度がどのような状態であるかを判断することが出来ない点である。これは、IKABO の知名度を表すためには必要不可欠な要素である。また、広報活動によって IKABO を知ってもらうメインターゲットが不明瞭であることが挙げられる。若年層または高年齢層であるのか、もしくは函館市民であるのかなど、対象を明確にする必要があり、行う広報活動も対象に合わせる必要がある。2 つ目は、IKABO に焦点を当てたイベントを行えていないことである。従来のイベントでは IKABO 出演の依頼を受け、その中で地元への貢献、宣伝を行ってきた。しかしこの方法では、依頼主の意向があるため、企画班が主導となって計画することは困難であり、宣伝対象や知名度調査が設定できないことも問題として挙げられる。また、従来のイベントでは IKABO のキャラクター性を伝えることに留まっており、観光用ロボットとしての側面を生かしきれていない面がある。

(※文責: 秋山翔)

Let's heap up Hakodate with squid type robot.

1.3 課題の概要

1.2 節による現状の問題を踏まえ、以下の課題を設定した。

(※文責: 秋山翔)

1.3.1 IKABO の知名度について

1. IKABO を宣伝する対象の決定
2. 知名度調査に関する適切な方法の設定

(※文責: 秋山翔)

1.3.2 IKABO イベントについて

1. 1.3.1 項で設定した対象に沿うイベント会場の選定
2. IKABO の観光用ロボットとしての側面を伝えるイベント内容の考案・実施

(※文責: 秋山翔)

第 2 章 到達目標

2.1 本プロジェクトにおける目的

今年度街頭で行った IKABO の知名度調査アンケートにおいて知名度が低かったため、IKABO を使ったイベントを開催して IKABO の知名度の向上を図る。また北海道新幹線開通時のイベントで IKABO11 号機を大々的に発表することを目的としている。

(※文責: 杉山梨花)

2.2 具体的な手順・課題設定

函館を盛り上げるための IKABO を使ったイベントの企画についての手順と課題について以下で説明する。

(※文責: 杉山梨花)

2.2.1 Twitter や Facebook を用いた広報活動

課題：前年度の引き継ぎ行い、編集の仕方について学ぶ。編集、更新によって IKABO についての情報や函館葛屋書店で行われるイベントの告知、IKABO ファンとの交流を行う。また、知名度の低い若年層、ロボットや IT などに興味のない層など新たなファン層の拡大を目指す。

(※文責: 杉山梨花)

2.2.2 ホームページの運営

課題：前年度の引き継ぎを行い、ホームページの編集や更新をすることによって、IKABO の宣伝、イベントの日程や内容などの情報発信やグッズの宣伝を行う。

(※文責: 杉山梨花)

2.2.3 イベントの企画と運営

課題：IKABO を使って函館を盛り上げるためのイベントを企画し、運営する。そのために、ターゲットユーザーの明確化、何の経験や知識を得られるイベント内容なのか等、イベントの詳細について企画する。また、北海道新幹線開通セレモニーイベントで IKABO11 号機をに発表するための起爆剤としてのイベントを企画、運営する。

(※文責: 杉山梨花)

Let' s heap up Hakodate with squid type robot.

2.2.4 街頭アンケートの実施

課題：前年度のアンケートを参考に、新しく内容を考えアンケートを作成する。函館駅やイベント会場など、人の多く集まる場所でのアンケートを実施する。アンケートの内容は、IKABO 知っているかどうか、年齢層、欲しいグッズ、IKABO プロジェクトに対する意見・感想等を記載する。アンケートの実施後には、統計をとり、IKABO の知名度を確認するとともに、今後のイベント企画に役立てる。

(※文責: 杉山梨花)

2.2.5 ロボットフェス・イン函館市民の会との会合

課題：前年度までに決定した IKABO11 号機の概要、コンセプト、11号機の使用等をまとめた企画書を作成する。この前年度までの企画書を元に、IKABO11 号機製作のための資金集めをできる企画書を作成する。また、アンケートをとることで市民の会の意見も反映させつつ、プロジェクト全体で納得のいく企画書を作成する。

(※文責: 杉山梨花)

Let's heap up Hakodate with squid type robot.

2.3 課題の割り当て

2.3.1 の手順 杉山

Twitter の bot 管理を行ったことがあり、また Facebook も利用したことがあるためこれらを利用して宣伝を行うことができると判断した。

2.3.2 の手順 秋山 和田

HTML の編集によるホームページ作成を行ったことはあるが、身につけている技術はまだ未熟だったため二人を担当とした。

2.3.3 の手順 グループ全員

グループ全体、またはプロジェクト全体でイベントの企画について話し合いを行うことによって、他の班からも様々な意見を取り入れ、プロジェクトメンバー全員が納得のいくイベントを企画・運営するため。

2.3.4 の手順 グループ全員

アンケートの作成と実際にアンケートをとりに行く人、アンケートの集計等の仕事をグループ全員で分担することで作業の効率化を図った。

2.3.5 の手順 グループ全員

企画書の項目ごとに、企画書、スライドを役割分担し、また更にそれぞれの項目で役割を分担して企画書を作成することで、作業の効率化を図った。

(※文責: 杉山梨花)

第 3 章 課題解決のプロセスとその結果

3.1 知名度向上に対するプロセスとその結果

まず始めとして現状の IKABO の知名度を調査するために IKABO に関する街頭アンケートを行った。調査地点は様々な年齢層が集まる函館駅前で行われた。アンケートの内容は「IKABO というロボットを知っているか」、「何で IKABO を知ったのか」、また「IKABO のグッズ」に関連するものだった。アンケートの調査について私たちは、認知度の向上を達成したという具体的な目標を設定せず調査に取り組み、とりあえずアンケートの集計を行っていた。また、どれだけの人数にアンケートを実施しフィードバックするののかというのも曖昧であった。そのため正確な知名度の調査が出来なかった。後期にイベントを行う際にもアンケートを実施する予定なので以上の点を踏まえアンケートの内容を緻密に考え実施していくつもりだ。

(※文責: 佐々木孟志)

3.2 イベントに対するプロセスとその結果

目標の達成のための 1 つのステップとして、IKABO のイベントを企画・運営を行う。北海道新幹線開通時に行う大きなイベントへの参加が計画されており、またそれに向けての知名度向上のためのイベントや応援活動が必要となる。そして、我々が大きなイベントを成功させるための企画力やイベント運営力を鍛えるため、提案型のイベントを企画開発するという方向に定まった。

(※文責: 佐々木孟志)

3.2.1 今年度のイベントの方向性

大きなイベントになればなるほど、大勢の人の前でイベントを行うことになる。ましてや、北海道で初めての新幹線が開通される際のイベントなので、その目新しさに若い人やお年寄り、家族連れなどの幅広い年齢層で賑わうことが予測される。そのことを踏まえた上で、我々の中で提案された開催地が函館蔦谷書店である。蔦谷書店は連日にわたって幅広い年齢層が訪れており、過去に数々のイベントが行われているので、そのような場所で我々もイベントを成功させることができれば、目標を達成するための大きな一歩になると考えた。

(※文責: 佐々木孟志)

Let's heap up Hakodate with squid type robot.

3.2.2 蔦谷書店でイベントを行うにあたっての準備

蔦谷書店でのイベントを検討する際に、蔦谷書店のことについて徹底的に調べた。まず、過去に蔦谷書店ではどのようなイベントが行われてきたのかを調べた。それらのイベントコンセプトで共通する部分を見つけることが出来れば、蔦谷書店でイベントを行う際に必要な条件を知ることが出来ると考えたからである。過去のイベントには様々なジャンルのものがあった。例えば、60、70年代のアメリカン POP's、ROCK についてのイベントがあった。これらに共通したことは、その分野に興味がある人以外に新たな分野を知ることのできるきっかけを提供するということである。そうして自分の知らない分野に興味を持てば、今までに無かった考え方や価値観を見出せ、それによって当人の生活の仕様も変わってくるのである。このことは蔦谷書店の経理概念である「新しいライフスタイルを提供する」ということにも合致し、これがイベントを行う際の必要な条件であると確信した。それを踏まえ私たち IKABO プロジェクトにしかできないライフスタイルの提供の仕方を考えることになった。

(※文責: 佐々木孟志)

3.2.3 イベントのコンセプトと内容

新しいライフスタイルという部分に着目し、一般の人々からはあまり関与することがない IKABO(ロボット)の技術的な部分に焦点を当てた。ロボットが動いているというその事実には何の疑問も抱かないと思うが、それはどのようにして動いているのかということになると、専門的な人でないとわからないはずだ。その”なぜ”に重点をおき、「IKABO を通して IT 分野に関する未知の体験をして貰おう」というコンセプトに決めた。イベント内容として、次の三つを考えた。1つ目は IKABO ショーである。来場してくれた参加者を対象に IKABO の紹介等を行う。また、タブレットで操作してもらい IKABO を身近に感じてもらうことを目的とした。2つ目は体感コーナーである。イベントの参加者にプロセッシングによる簡単なプログラミングを体験してもらい、感覚的な価値観を広げてもらおうというものである。3つ目は IT・IKABO カフェである。IT や IKABO に関するテーマを参加者に提示し、それぞれの意見を出し合い、自分自身の答えを探してもらい、理論的な価値観の広げ方を提案するものである。

(※文責: 和田拓馬)

Let's heap up Hakodate with squid type robot.

3.2.4 蔦谷書店との話し合い

コンセプトと企画内容を決め、実際に蔦谷書店との話し合いを行うことになった。6月13日に蔦谷書店に行き函館蔦屋書店の塚本さんとイベントに関する会議を行った。我々の企画のコンセプトについて、塚本さんからは5W1Hをはっきりさせること、現状のIKABOではどのようなイベントができるのかを考慮しながら決めること、などの指摘を頂いた。また、内容についてもイベントを介して価値観を変え、新たなライフスタイルを提供するならばもっとインパクトのある刺激的なものにするという指摘があった。それを実現するならば、ワークショップとサイエンスカフェを別に行うのではなく同時に行うべきというアドバイスを頂いた。最終的には塚本さんからは「蔦谷書店でイベントを行うために熱心に検討してくれていることが伝わった」という言葉を頂き、我々が企画したイベントを行うことを約束してくれた。

(※文責: 佐々木孟志)

3.3 企画内容

3.3.1 IKABO ショー

IKABOについて知ってもらい、よりIKABOを身近に感じてもらうことを目的に企画した。まず、我々のプロジェクトがどのようなことをしているのかを伝える。それからIKABOが製作された経緯やIKABOの機能を簡単に説明し、新たに製作されるIKABO11号機の宣伝を行い、来年度に行われる北海道新幹線開通セレモニーでIKABO11号機が観光客を迎える予定であることを伝える。そして、IKABOについて知ってもらった後、参加者にタブレットを渡し実際にIKABOを操作してもらう。これにより、より身近にIKABOを感じてもらえることができると考えた。

(※文責: 和田拓馬)

3.3.2 体感コーナー

体感コーナーでは、「ITを利用して新しい体験を知り、その体験を日常へ持ち帰ってもらい、ITや未来について興味を持ってもらう」ということを目的として製作班にも協力してもらいながら企画した。このコーナーでは、次の二つの体験を考えた。一つ目は、Processingを使ってIKABOの制御を行っているプログラムを簡単に学んでもらう体験である。まずは簡単な関数を教えてからそれを実際にどのように使うのかを教え、実際にプログラムを打ってもらうものである。さらに応用として、参加者に私たちの作った作品で遊んでもらい動く作品を作ってもらった体験を付録として企画した。二つ目は、Kinectを使って画面に映った自分がヒーローになりきるといった体験である。この体験を通して新しいIKABOに搭載される予定であるKinectとはどのようなものなのか実際に体験して理解してもらえることができる。1つ目のプログラミングの体験と違い、特に考える必要もなく、身体を使った体験なのでより簡単にITに触れてもらえる体験である。

(※文責: 杉山梨花)

Let's heap up Hakodate with squid type robot.

3.3.3 IKABO カフェ

IKABO カフェでは、「お客様と学生や教授が同じ目線で語り合い、IT の今を知り未来を語ることで興味を持ってもらう」ということを目的として企画した。実際には、IAKBO や IT についてグループディスカッションをしていくという、サイエンスカフェやワールドカフェに類似した体験をしてもらうものであった。「人気の出る未来のロボットを考えよう！」を IKABO カフェのテーマとした。まず、IKABO についての簡単な説明を行い、新しく製作する IKABO はどのような要素があれば人気ができるのかについて「キャラクター性」という観点から、人気のあるふなっしー、くまモン、ずーしーほっきーを例に、「人気の出るキャラクターにはどのような特徴があるのか」についてディスカッションしてもらうことを1つ目のお題とした。4人を1グループとして私たちが年齢、性別がバラバラになるようにグループを作り、ディスカッションをする前には参加者同士で話しやすい雰囲気を作るために、最初に自己紹介の時間を設け、ディスカッションを25分間行ってもらい、付箋に文字として書き起こしてもらう。次に、参加者をシャッフルして違うメンバーで「近未来のIT技術をIKABOのどこに使うとより効果的なアピールが出来るか考えてみよう！」というお題で同じく25分ディスカッションしてもらう。そして最後に、これまでの二つのお題でディスカッションした内容を踏まえて、「人気の出る未来のIKABO」をスケッチしてもらう。1グループで一つのスケッチをしてもらい、最後に先生に良かったスケッチを選んでもらう。スケッチという成果物を作ることによって参加者には満足感を得てもらい狙いがある。そしてこれらのディスカッションを通して、最後に参加者が感じたことをフィードバックとして書き出してもらい IKABO カフェの体験を持ち帰ってもらい終了とした。この IKABO カフェでは3段階のディスカッションを通して IKABO について考えてもらう機会を作り、函館市民の方々に IKABO をより身近に感じてもらうことができる。

(※文責: 杉山梨花)

3.4 イベント当日

11月23日の日曜日、函館蔦屋書店にてイベントが行われた。連休の真ん中ということもあり、函館蔦屋書店を訪れている人の数も相当なものだった。そんな中、13:00からイベントのスタートである IKABO ショーが始まった。同時に、来場者に「IKABO 知名度アンケート」を行い、有益な意見をいただいた。家族連れの参加者にショーを行い、タブレットで操作してもらったところ、とても満足してもらえたようだった。それを皮切りに続々と参加者が訪れた。主な客層が家族連れということもあり、IKABO を操作できる IKABO ショーとヒーローになりきれ kinect の体感コーナーは非常に盛り上がった。しかしその2つとは裏腹に、もう1つの体感コーナーであるプログラム体験コーナーは勧めたにもかかわらず思うような人数に来ていただくことができなかった。これは場所が Kinect の体感コーナーのスクリーンに隠れてしまっていること、また家族連れであまり時間を取ってもらえないこと、子供の年齢層が我々の想定していた中高生以上よりもかなり低かったことなどの理由が挙げられる。また、イベントの目玉としていた IT・IKABO カフェも事前から宣伝し、当日も募ってはいたのだが、応募者はとうとう現れず開催することができなかった。最終的に、イベントの参加者は100人を超え、訪れた参加者にも満足してもらえたように思える。しかし、我々の想定していた通りの成果を得られたとは言えない結果となった。

Let's heap up Hakodate with squid type robot.

(※文責: 和田拓馬)

3.5 アンケート

3.5.1 概要

函館蔦屋書店イベント内でアンケートを行った。条件はイベントの開始直後から終了までの約4時間行い、配布の方法は、参加して頂いた方に直接声をかける、イカボショーを見に来ていただいた方に配る、受付に常設することで行った。以下にアンケートの結果を記す。

(※文責: 秋山翔)

3.5.2 アンケート内容

問1 あなたの性別を教えてください。

1. 男性
2. 女性

問2 あなたの年齢層はどれに該当しますか？

1. 10歳以下
2. 10代
3. 20代
4. 30代
5. 40代
6. 50代
7. 60代
8. 70代
9. 70歳以上

問3 イカボを知っていますか。

1. はい
2. いいえ

問4 問3で「はい」と答えた方に質問です。どこでイカボのことを知りましたか。あてはまるものすべてに印をつけてください。

1. 港祭り
2. Youtubeの動画
3. 未来祭
4. その他

Let's heap up Hakodate with squid type robot.

問5 グッツに関する質問です。IKABOのグッツを持っていますか？持っているグッツ、又は今回購入したグッツがあれば、すべてに印をつけてください。持っていないければ、持っていないに印をつけてください。

1. 持っている
2. 持っていない

1. IKABO キューピー
2. IKABO 缶バッジ
3. IKABO プロジェクターボールペン
4. IKABO T シャツ
5. IKABO マグネット
6. IKABO キーホルダー

問6 グッツに関する質問です。どのようなグッツがあれば欲しいですか？ご自由にご記入ください。

問7 イカボプロジェクトに関するご意見、ご感想等、ご自由にご記入ください。

(※文責: 秋山翔)

3.5.3 アンケート結果

問1では、男性が9人、女性が14人となった。問2の年齢層に関しては、10歳以下が1人、10代が4人、20代が5人、30代が2人、40代が7人、50代が1人、60代が0人、70代が1人となった。20代や40代の回答数はおおむね満足だが、メインターゲットと設定した高校生などの学生のアンケート収集が思うように振るわなかった。また、50代以降のアンケート収集に関しても、合計2人となっており、高齢者に対しても、イベントに入りやすいような雰囲気作りやコーナーを設ける必要があった。問3に関しては、「はい」が14人、「いいえ」が9人と、約6割の方々に認知されていることが分かった。これは前年度のアンケート結果とほぼ同じ結果であり、IKABOの認知度は横ばいになっていることが分かる。問4では、港祭りが9人、Youtubeの動画が2人、未来祭が1人、プロジェクト学習発表が2人、その他が4人となった。港祭りでの認知は高く、これからも継続して行うと共に、実際に気軽に見てもらえるイベントを増やすことが重要であることが分かった。問5では、持っていると回答したのが4人であり、IKABOのグッツを配る機会を増やすことが必要であることが分かった。問6では、「ノート等使えるもの」という実用的なグッツを希望する方や、「かわいーやつ」など抽象的な回答も散見された。問7では、「楽しいイベントなのでもっとやってほしいと思いました。(20代男性)」や、「楽しかったです(40代女性)」などイベントに関する意見や、「声が出るとおもしろそう(40代女性)」などIKABOの新しい機能に言及している方もいた。

(※文責: 秋山翔)

Let's heap up Hakodate with squid type robot.

3.6 フィードバック

函館蔦屋書店での IKABO 体験ショーを終えて、プロジェクトメンバー全員でこれまでの前期からの活動を通してのフィードバックを行った。この話し合いで出てきた課題として、まず1つ目に宣伝不足が挙げられた。開催日時は1ヶ月程前に決定はしていたが、内容が決まっていなかったために宣伝を上手くできなかった。また、Twitter、Facebook での宣伝を行っていたが閲覧が少なく、あまり宣伝の効果が得られなかった。その結果、人が集まらず IKABO カフェを中止してしまった。したがって、来年度以降は宣伝の範囲を拡大していく必要がある。対象年齢が小・中・高校生であれば学校へ出向いて IKABO やプロジェクトの説明、イベントの宣伝を行う必要が出てくる。そのために、これまでの企画班、製作班、グッズ班の他に「宣伝班」を作るべきではないかとの意見も出た。また、宣伝するためにはしっかりとターゲットの設定を行うことも課題として挙げられた。2つ目に、プロジェクトメンバー間での共有が上手く出来ていなかったことが挙げられた。活動では、それぞれの班で役割分担を決め、それぞれが活動をしていた。毎週水曜日には進行度を示して報告会を行っていたが、実際にどのようなことをしているかしっかりと認識している人は少なかった。そのため、他の班との連携を上手く取ることができなかった。解決策としては、毎週の報告会をもっと重要視し、個人個人が他の班の進行度を知り、連携をとっていくことが大事である。3つ目に、イベントを行う会場配置の認識不足や、看板の不足、アンケートのタイミングがわからなかったなど、全体的に事前の準備不足が目立っていた。当日までのプロジェクトメンバーの意識改善や、準備を念入りに行うことで改善していけるだろう。

(※文責: 杉山梨花)

Let's heap up Hakodate with squid type robot.

第 4 章 プロジェクト内のインターワーキング

4.1 プロジェクト全体での合同作業

IKABO の新作である 11 号機の製作にあたって 11 号機のコンセプト、デザインを考案し、昨年度から引き継いだ設計図の手直しを行った。IKABO11 号機のコンセプトとして、我々が考えたのは”わ”である。これは『コミュニケーションの”輪”、人と場所を繋ぐ”環”、”和”風』といった意味合いが含まれる。また、このコンセプトは 1 号機のコンセプトの一つである「連携」を受け継ぐ形になっており、11 号機を通じて、函館を世界に発信したいという思いが込められている。今後の具体的な方針としては、港祭りを含めたイベントを企画、参加し、IKABO の知名度の上昇、ひいては函館の魅力の発信に繋がるように努めていきたいと考えている。本プロジェクトでは作業の効率化を図るため三つに分かれた班のそれぞれの個人メンバーの進捗報告を後期から報告会に取り入れた。各個人の作業をプロジェクト全体で共有することで前期よりもスムーズに課題達成のための取り組みを行うことができた。

(※文責: 佐々木孟志)

第 5 章 まとめ

5.1 プロジェクトの成果

5.1.1 IKABO の知名度について

IKABO を宣伝する対象として、函館市民に重点を置いた。理由としては、函館新幹線開業イベントに出演する予定の新型 IKABO11 号機に対し、函館市内での機運醸成を狙ったものである。また、知名度調査アンケートは IKABO イベント内で行うことに決定した。

(※文責: 秋山翔)

5.1.2 IKABO イベントについて

会場を函館蔦屋書店に決定した。イベントのコンセプト、目標、双方における利点の説明などを、企画班だけでなく、製作班やグッズ班とも協議を重ね、函館蔦屋書店担当者との打ち合わせを繰り返し行い実現することが出来た。また、11 月 23 日に予定通り実施、開催し、約 100 人以上の来場を迎えることが出来た。

(※文責: 秋山翔)

5.1.3 インターネットを用いた広報活動について

Twitter と Facebook、IKABO ホームページの更新を行った。

(※文責: 秋山翔)

5.1.4 その他企画班の活動について

5 月下旬に外部の先生方を招いたプロジェクト学習説明会での準備、発表を行った。6 月中旬ではロボットフェスイン・はこだて市民の会との総会に参加し、IKABO の今後の展望について意見を交わした。

(※文責: 秋山翔)

Let's heap up Hakodate with squid type robot.

5.2 プロジェクトにおける自分の役割

5.2.1 佐々木孟志

企画班のグループリーダーとしてイベント案の話し合いで中心となり効率的な議論ができるように意識するよう心がけた。グループメンバーの仕事の向き不向きを判断し誰がどのような仕事を行えばより良く企画班が活動できるのか日頃考えながらプロジェクトに望んだ。議論の場で自ら積極的に発言しグループメンバーの雰囲気盛り上げ常にモチベーションを高い所にあるようにも心がけた。また、他の班のリーダーとも連携してプロジェクト全体での共通の意識を保つようにした。製作班には IKABO11 号機的设计図制作を依頼しグッズ班にイベントで販売・無料で配布するグッズ制作の依頼を行った。毎週水曜日にあるグループ報告でスライドを作りプレゼンを行い企画班の進捗情報をプロジェクト全体に報告した。また、葛谷イベントが近づくにつれて各班ごとの作業量に差が出始めてきた。その差を埋めるためにグループリーダーとして積極的に他のグループの作業を行ったり必要であればメンバーを他のグループに派遣することを行った。私自身は、イベント当日に会場に展示する大型のパネルの制作をグッズ班の熊谷君と行った。私がパネルに記載する記事の内容やタイトルなどを考え熊谷君がパネルのデザインや体裁を考えてくれた。作業をともに行っていく中で自分にはない考え方や知らないアプリケーションの使い方を知ることができとても刺激をもらいながらの作業となり良いものだった。本プロジェクトを通してグループで課題に取り組む難しさとそのノウハウや効率的なやり方を学ぶことができた。また、グループで具体的な課題を設定できたことで、課題解決という目標に向かって我々自身は意欲的に取り組むことができ、その過程で自分なりのやり方を獲得することができた。

(※文責: 佐々木孟志)

Let' s heap up Hakodate with squid type robot.

5.2.2 秋山翔

プロジェクトリーダーとして、プロジェクト説明会や市民の会総会などにおいてプレゼンターとして報告を努めた。IKABO の観光用ロボットとしての更なるイベントの開拓や、新型の 11 号機コンセプトの打ち直しなど、今年度の抱負が良く伝わるように努力した。また、積極的に外部との連絡を取るよう心がけた。函館蔦屋書店や市民の会への連絡を行った。IKABO 単独のイベント開催を提案し、IKABO イベントの責任者として、円滑にイベントが行えるように作業を行った。イベントの IKABO カフェ等の概要と設定を考えた。IKABO カフェは、IKABO のキャラクター性と IT という 2 つの性質を持つということと、その 2 つから見える未来の IKABO 像をスケッチするという内容のもので、ファシリテーターといわれる司会進行、事前準備、スライド等全ての作業に貢献した。また、全体の進捗を確認し、足りない情報や問題点があった際は、実際に現地を見学しメンバーに報告した。函館蔦屋書店との連絡を随時報告したり、企画班やその他メンバーの要望を聞き、函館蔦屋書店へ報告するなど、本プロジェクトとイベント先である函館蔦屋書店とのパイプ役を務めた。解決した問題点や新たに浮上した問題点をホワイトボードに書くことで視覚化し、メンバー全体で共有することを心がけた。イベント終了後では KPT シートを用い、メンバーが考えていることや思ったことをシートに貼り出していくことを行った。本プロジェクトでは、全体の進捗管理や課題の設定と解決、仕事の振り分けなど、実際に経験することで初めて分かる難しさや苦悩があった。このノウハウを来年度のプロジェクトに活かせるよう引継ぎ等を積極的に行っていききたい。

(※文責: 秋山翔)

Let's heap up Hakodate with squid type robot.

5.2.3 和田拓馬

グループリーダーのサポート役として、蔦屋イベントの内容の考案、検討を行った。主に IKABO の誕生の経緯や我々についてなどの説明をし、参加者に IKABO をタブレットを用いて操作してもらおうという IKABO ショーを担当した。また、イベント当日には受付を担当し、参加者に知名度アンケートとイベント感想アンケートを行ったり、IKABO カフェへの参加者を募集した。当日のイベント参加者は 100 人を超え、イベント内容に満足してもらえたように思える。しかし、イベント時間中に実施したアンケートの回収率は高くなく、知名度アンケートは 20 枚程度、イベント感想アンケートは 0 枚という残念な結果となってしまった。さらに、同時に行っていた IKABO カフェへの参加者募集にも、結局人は集まらず IKABO カフェを開催することができなかった。もう少し受付として積極的に参加を促していけば良かったように思う。他の作業として、IKABO 公式ホームページの更新を行った。本年度の活動の写真を載せ、また文章で何を行ったのかを宣伝し、IKABO の知名度を函館だけでなく全国に広げるために行った。このホームページを利用し、また函館蔦屋書店の公式ホームページのイベント情報詳細にもリンクを貼ってもらい、蔦屋イベントの情報を拡散させようとしたが、あまりイベント参加者の増加に貢献できたかどうかは実感できなかった。中間発表では企画班と全体のポスターの文章、レイアウトの雛形を作成した。また、最終発表では中間発表での反省を活かし、プロジェクト内での自己満足で終わるのではなく、プロジェクト外の人にも分かりやすいものにしようと企画班のポスターの文章、レイアウトを他のメンバーと共に作成した。発表の際には、聴衆にうまく伝わるように分かりやすく発表したつもりである。1 年間の活動の中、自分なりにできることをやってきたと思う。

(※文責: 和田拓馬)

Let' s heap up Hakodate with squid type robot.

5.2.4 杉山梨花

グループリーダーのサポート役として、イベント案の話し合いにおいて内容の考案に力を入れた。加えて、話し合いの結果をまとめて資料を作成したり、毎週行われる報告会ではローテーションを組んで前週の活動報告書の作成を行った。また、Twitter や facebook を用いて IKABO の宣伝やプロジェクトの活動内容、IKABO11 号機についての情報発信等の広報活動を行った。函館蔦屋書店で行われたイベントでは、体感コーナーの企画を担当した。内容は製作班に手伝ってもらい、Processing を用いてプログラミングを教えるコーナーと Kinect を用いてヒーローになりきる体験を企画した。当日はプログラミングのコーナーにはあまり人が集まらなかったが、Kinect のコーナーには子供たちが多く集まり楽しく体験してもらうことができた。また、このイベントで実施したアンケートの作成を担当した。アンケートの項目が多いことや、知名度に関するものと、イベントに関するアンケートに分けて作成したために、アンケートの回収率が悪かったことやアンケートをとるタイミングをつかめず予想をしていた人数にアンケートを回答してもらうことができなかった。来年度はこの結果を活かして、予想した人数分のアンケートを回収できるように工夫してもらいたい。イベント後にプロジェクト全体で行ったフィードバックでは、企画班に関する多くの問題が挙げられた。したがって、この問題についても来年度のプロジェクトメンバーで検討、対策をしていただきたい。中間発表においては、プロジェクトと企画グループのポスターを作成し、スライドとポスターの内容がリンクするように内容を考えて作成した。発表では後半の企画班の内容を担当し、聞いている人に活動目的やコンセプト、イベントをする意味等が正しく伝わるように、スライドに書いてある内容だけでなく詳細についても説明するよう心がけた。そして最終発表では、企画グループのポスター制作を担当した。前回のポスター作りの反省点を活かして作成に取り掛かったが、イラストレーターの使用に時間がかかった。しかしこれによりイラストレーターの使用技術能力が多少ついた。当日の発表に関しては、前日に練習に参加できなかったがグループメンバーに協力してもらいアドバイスをもらいながら、自分なりに 1 年間プロジェクト活動してきたことを踏まえて、聞いている人にわかりやすく伝えることができた。

(※文責: 杉山梨花)

第 6 章 今後の展望

6.1 企画・提案について

来年度以降は、今年度開催したイベントのように新規イベントの企画を増やしていくことで新規開拓を目指し、更なる IKABO の知名度向上を目指していく。これによって、函館市民に IKABO を身近に感じてもらい、IKABO のキャラクターとしての確固たる地位を目指していく。加えて、例年のイベントにも積極的に参加していき、イベント内容の他にもこちらでも新規イベントを企画・提案していくことでより函館を盛り上げていくことを目指している。また、今年度開催した函館蔦屋書店で行った IKABO 体験ショーのような継続して開催できるようなイベントを企画していきたいと考えている。そのために、函館蔦屋書店でのイベント後に行ったフィードバックで出てきた課題を、来年度のプロジェクトメンバーに伝え、より良い企画をしてもらいたいと考えた。

(※文責: 杉山梨花)

6.2 来年度の新幹線セレモニーイベントについて

来年度は例年のイベントに加え、来年度行われる北海道新幹線開通セレモニーで IKABO を宣伝するためのイベントを実施することを目指している。このイベントを実施するために、今年度行った函館蔦屋書店でのイベントや例年のイベントを行った際の課題をもう一度確認し、北海道新幹線開通セレモニーで行うイベントでは、より IKABO を知ってもらうためのイベントを企画することを目指している。

(※文責: 杉山梨花)

6.3 例年のイベントについて

本プロジェクトでは、例年花と緑のフェスティバルや函館港祭り等といったイベントに IKABO の知名度を上げ、函館を盛り上げるために参加している。それらのイベントに今後も参加していく。また可能であればそのイベントの中でできる新たな企画を検討し、今まで以上に IKABO の知名度を上げ、函館を盛り上げていく予定である。そうすることで函館市民により身近に IKABO を感じてもらうことができると考えている。

(※文責: 和田拓馬)

Let' s heap up Hakodate with squid type robot.

6.4 函館蔦屋書店イベント

本年度は、蔦屋イベントという新たなイベントを我々からの依頼で実現することができた。イベント内容としては前述の通り、IKABO についての説明を行い、実際に触れてもらう IKABO ショー、IKABO11 号機に搭載される予定の Kinect の体験や、簡単なプログラミングが学べる体感コーナー、IKABO や IT について話し合うという IKABO カフェの三つを考案、企画した。さらに、来場者から貴重な意見を取り入れようと、IKABO を知っているか、どんなグッズが欲しいかなどといった内容の IKABO 知名度アンケートを作成した。このイベント内容の企画から運営までのプロセスや、実際にイベントを行って来場者から得られたアンケートの結果やフィードバックを行って分かった反省点をしっかりと次のプロジェクトメンバーに伝え、蔦屋イベントを今後も続けていけるようにしていかななくてはならない。

(※文責: 和田拓馬)